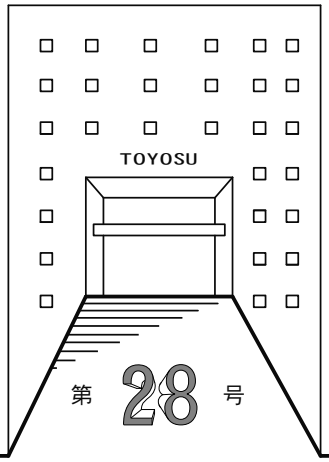
建築学科卒業生たより
芝浦工業大学
建築会

ご寄稿頂いた皆さま

鈴木泉　辻垣正彦　長谷部美紅
鈴木寛己　菅野茂一　白子隆
勝部民男　加治喜久夫　竹久保洋
松崎雅子　林要次　田内徹郎
青木貴宏　功刀強　堀越英嗣



第28号

芝浦工業大学建築会
〒一三五-八五四八
江東区豊洲三-七-五
〇三(五八五九)八四〇〇
http://sit-arch.com
二〇一二年一一月一日　刊行

建築会の取り組み
～会長再任に当たり
鈴木泉（一九八六卒）

平成二〇年に石井前会長より会長職を引き継ぎ、昨年（平成二三年）会長に再任されました、昭和六三年学科卒の鈴木泉です。この度、会報二十八号を発刊するに当たり、近年の建築会の取り組みについてご報告いたします。

建築会では、会報・名簿の発行といった卒業生向けへの情報発信と、デザインチャンピオンシップへの支援や卒業生最優秀賞の授与といった在校生への支援を行ってまいりましたが、それら事業に加えて、卒業生相互のより一層の交流を深めるため、一昨年より「建築会同窓会」と題するイベントを総会開催年（三年毎）以外の年に開催する事とし、一昨年の第一回同窓会では、学科卒業生である五十嵐久也芝浦工業大学法人理事長をお招きして「芝浦工業大学の現状と未来像」についてご講演いただいた後、建築業界において、近年もっとも話題を呼んでいる「東京スカイツリー」について、建築会常任幹事の島崎寛氏（日建設計勤務）より資料提供をいただき、概要についてご説明いただきました。

そして、本年は、一二月八日（土）に、「第二回同窓会」を開催します。昭和二九（一九五四年）年に開設された建築学科は、再来年の二〇一四年に満六〇年を迎える事から、「建築学科創立六〇周年の光と影」と題した座談会を、石川洋美名誉理事長、三井所清典名誉教授、枝広英俊教授、加藤國雄元建築会会長を招いた座談会を開催いたします。本年の同窓会の取り組みにより、建築学科卒業生各位に創立六〇年を祝う機運が盛り上がる契機となれば幸いです。

また、末筆となりましたが、本年八月十一日に、永年建築学科の教鞭を執っていただくと共に、建築会の活動に理解を示していただきその活動を支えてくださった小柳津醇一名誉教授が永眠されました。謹んで、ここに哀悼の意を表します。

【佐藤総合計画　企画推進室　勤務】

小柳津醇一君を悼む
辻垣正彦（一九六四卒）

八月十一日亡くなる二週間前、建築学科の親友三人が連れ立って千葉の自宅に見舞ったばかりなのに・・・。急に身罷ってしまい悔しい思いでいっぱいです。

我々が入学したのは一九六〇年安保の年。社会騒然、スクラムを組みながら「安保反対」を叫び新橋駅から議事堂迄行進した時代。私達は設計事務所に就職しました。

君は村田政真建築設計事務所へ、それから二年嶺岸泰夫先生、石川洋美先生に口説かれ母校の教師となりました。学生時代からロジカルで抜群にデザインの出来る人でした。

病床で激痛に耐えている束の間に描いたスケッチを拝見しました。伸び伸びとした屋根の線、魂が描いているとしか思えない。真に命懸けのスケッチ。力強く、大らかな線が心を打ちます。最後の最後迄建築を通して人々と交わり人生をデ

ザインしたのですね。

このタイトルが「雪明りとトドロキ　自然の中のコンサート」自筆されています。

「コンペがあったら皆んなと出したい」「建築の仕事はコンペで勝ち取るものだ」という信條は変わらなかったね。どれだけ多数のコンペに挑戦したことでしょう。

「すごいなあ」学生一人一人を思い遣り常に大学に留まり研究と教育を通して社会と闘っていたね。その醇な姿、ひたむきな姿勢は四五年間変わらず、学生一人一人に強い印象を与えました。

「コンペがあったらみんなと出したい」皆んなと出す。この叫びがすごいなあ。自分一人だけでなく多勢の仲間達とコンサートホールのコンペに挑みたいと云う。

小柳津さん天国でみんなと一緒にコンペに参加しこの世で遣りたかった思いをデザインしコンサートホールを実現しておいて下さい。私共も楽しみにしております。

残された人生、君の描いた「みんな」と共に生き、ささやかに社会に対してデザインしたいと思います。

建築の真髄求めてひた走る学生育み花咲かす君

合掌

【辻垣建築設計事務所　主宰】

建築材料・施工研究室
枝広研究室レポート
長谷部美紅（大学院　建設工学専攻一年）

今年度の枝広研究室には、大学院生が一名・学部生が一一名の計一二名が在籍しており、枝広英俊教授の熱心なご指導の下、日々、各自が定めた目標を達成すべく、研究活動に取り組んでいます。建築学科では唯一、建築材料・施工分野を追究する研究室であり、豊洲校舎の七階研究室と一階実験室を行き来する毎日ですが、日頃どのような活動をしているのか、その一部を紹介していきます。

本年度学生と昨年度卒業生との集合写真

まず、当研究室は、高校生が憧れるであろう建築デザインのようなスタイリッシュな分野、または、パソコンを駆使して解析・最適化を行うスマートな分野とは少々雰囲気が異なり、頭脳はもちろんのこと己の筋肉と根気もフル活用する、良い意味で泥臭い研究室であることを知っていただきたいです。というのも、今年の学部生の研究テーマのうち、半分はタイル・塗料の材料や内装材の施工等についてですが、もう半分はコンクリートについてであり、その耐久性や施工性向上・新機能性付加などまだまだ可能性が未知数である材料を、理論だけでなく実験することで追究しています。つまり、コンクリートを打つ（打設する）ことは必須であるわけですが、材料の一部である骨材を一日三〇〇キロ近く洗ったり、一〇時間近く砕石を粉砕し続けたり、一つ一〇キロの試験体を肩の上から足の下まで上げ下したりする作業は日常茶飯事で、若さがあるといえど毎日繰り返せば、正直、肉体的にも精神的にも大変な作業なのです。しかし、それでも根気よく続けていられるのは、当研究室の誇りである「仲間と協力し合うこと」が武器になっているからです。時には皆でお酒を酌み交わし、時には厳しく議論をしながら、いつも心強い味方だと思って、頼り助け合って頑張っています。

自分で考えることを大前提とし、各々計画を立て、仲間を巻き込んで実行し、結果をよく解析・考察するという一連の作業を繰り返して、何らかの形で社会に貢献できるよう日々努めています。今後とも、枝広研究室をどうぞよろしくお願い致します。

建築・環境設計研究室
原田研究室レポート
鈴木寛己（大学院　建設工学専攻二年）

原田研究室は大学院生が九名、学部生が八名の計一五名が在籍しています。今回は原田准教授の指導の下行われている研究室の活動を紹介します。

まず卒業設計・修士論文のゼミ活動は毎週一回行われ、進行役を学生が行います。各自の研究テーマを発表し、参加者全員がその議題に対し多様な意見やアイディアを出し合います。学生が主体的に議論の出来るような場にするため原田准教授は学生の意見を引き出し、舵を取ることで創発的な議論となるようにしています。またこのゼミ活動とは別に毎週テーマに沿った建築模型をつくり、持ち寄って議論する活動も行っています。これらの活動で生まれたアイディアを基に設計競技会に挑んだり（受賞数も伸びています）、セルフビルドを行ったりと様々な事に活動を拡げています。

研究室の風景

次に研究室全体の活動では原田准教授の方針により現実的な設計提案やセルフビルドに携わり「建築する」ということを実践しながら学んでいます。昨年はある建築系雑誌の企画から東日本大震災の被災地における復興案を提案し、誌面掲載や森美術館での展示・発表をしました。また原田准教授が主宰するアトリエの監修の下、某展覧会の会場構成も行いました。このようにクライアントがいる活動では責任感を持ち仕事をする経験ができ、また実際の材料を用いて建築や空間をつくり上げることで、机上でしか行われない設計課題では学べない様々な事を学んでいます。

昨年は、一昨年に設計・施工を行った「佐賀町アーカイブス」という中学校の教室をアートギャラリーにリノベーションした作品がイギリスのAR　AWARDという作品賞を頂けるなど嬉しい報せもありました。原田研究室はこれからも理論と同時に体験的に「建築する」ことを学び、良好な質を持った建築や都市環境を提案できるよう努めていきたいと考えています。今後ともよろしく御願い致します。

集合写真

後期高齢者のこれから

菅野茂一（一九五九卒）

私のところにこのような依頼をいただくことなどまったく想像できませんでした。

後ほど記しますが、グランドでゲートボールの練習中に突然携帯電話が鳴り同級のEさんより電話がありました。

何でも、建築会幹事の井家氏よりの依頼で、私の名前があがったとのことで、後ほど井家氏から、あらためて連絡をもらい、引き受けることになってしまいました。

まったく文章が苦手な私ですが、いまとりくんでいる認知症予防に効果があるといわれているゲートボール及びその他のスポーツにもとりくんでいる近況を記します。

まず、私の卒業後を簡単に記します。

一九五九年（昭和三四年）芝浦工業大学建築学科を卒業し、村田政真建築設計事務所に採用されました。一九八〇年（昭和五五年）二一年間お世話になった事務所を退職し、独立する決心をしました。

そして、この年カンノ設計室を開設しました。以後三一年間一人事務所として仕事を続けてきましたが、二〇一一年に廃業届けをし、事務所を閉めました。

まず、廃業前に始めたのは野球です。六十二歳のとき練馬

集合写真

区報内に還暦野球チームの募集を見つけ、加入しました。以降今日まで、古希野球になりましたが、毎週二時間のプレイを楽しんでいます。他にも、この野球仲間にスキー好きがいて、最低年一～二回のスキー行きを実行しています。このように、仕事をやめた後は、スポーツづくしの日々を送っています。

現在は、二年ほど前に、一歩先行していた家内のすすめで始めた、現在巷で評判の悪いゲートボール競技にのめりこみ、週三～四日（一日約三時間）の練習を続けています。この競技は、認知症予防に効果があるという評判も耳にしていますが、なかなか難しい競技であることがわかりました。

簡単に競技内容を説明いたしますが、試合は、紅白五人づつの二チームで競技します。

紅玉（奇数番号）、白玉（偶数番号）を交互に打撃し、如何に互いの玉を、邪魔をしながら三〇分間で、三箇所のゲートと、グランド中央のゴールポストに当てて何点（ゴールポストにあたって合計五点）獲得するかを競うものですが、状況判断が非常に難しくキャプテンの作戦により勝敗がわかれます。

経験の浅い私は、まだまだ作戦の判断がままならず、早い指示が出せないので、これからも、毎回の練習を重ねてゆきたいと思っています。

これからは、残りの余生を健康と楽しみそして認知症予防を目的におくってゆきたいと思います。

古希を迎へて

白子隆（一九六四卒）

私は卒業後、西松建設（株）に入社し、三八年間、現場、設計、営業と建設業界一筋に歩んできました。六〇才でリタイヤし、それからの一〇年間の過ごし方を振り返ってみたいと思います。

六〇才を迎え今迄の激務から開放され、どう過ごしていくか？皆様と同様に思い悩みました。仕事を続けるか、何か趣味をさがしそれに向けて挑戦するか、ずるずると時が過ぎ、仲間の仕事を手伝ったり、今迄好きだったデキシーランドジャズのライブハウスにでかけたりしていました。デキシーランドジャズのライブハウス通いをとおして、仲間が増え段々とリスナー（ジャズを聴くだけ）だったのが、何か楽器を自分で演奏してみる気がまわりの仲間の勧めもあって高まり、バンジョー（アメリカで発達した四弦の楽器）を習い始めました。六五才から始めた為、仲々上達しません。そんな中プロのバンジョー弾きから、もっと高い楽器を使えばより練習もはかどるとの助言をもらい、大枚をはたいてすばらしい楽器を購入しました。

高い楽器を購入してから練習時間も増え、徐々にデキシーランドジャズ仲間にも小生がバンジョーをやっている事が知れ、仲間でバンドを組んで練習を始めました。良き指導者にもめぐまれ、週一回の練習をつんで、八名の仲間（全員リタイヤ組）と二年間、ニューオリンズジャズの賛美歌を中心に（メロディーがやさしい為）曲数を増やしていきました。その内ある新宿のライブハウスのオーナーの好意により月一回のライブを開催するまでになってきました。又、仲間も増え、今では一五人にもなり、すべてがリタイヤ組の人達です。いかに我々の年代は、元気で時間を持っている人が多いか実感しています。この年でつたない演奏ですが、大勢の観客の前で演奏できる喜びは、なにものにもかえがたいものです。自分自身ではデキシーランドジャズをやっていれば絶対にボケ無いと妻とも話をしています。

老いとの競争ですが、もう少しこれからも続けて行くつもりで毎日を過ごしています。

三、一一大津波が襲いました

勝部民男（一九六九卒）

昨年の三月一一日、東日本大震災による大海嘯が北日本太平洋沿岸を襲った。芝浦工大の同窓生、関係者で被災された方も多く、改めてお見舞い申し上げます。

特に岩手県の芝浦工大・建築会会員の大槌町の千葉親市先輩（一九六三卒）の行方不明報は衝撃的でした。皆を誘導し一旦は高台に避難した後のことだったようです。千葉さんには校友会のみならず建築士会等の活動の中で、いつもお世話になり日頃から忌憚のないお付き合いをさせていただいていましたので大変なショックでした。

私は内陸部の生まれ育ちですが、沿岸部に親戚が多かったためでしょうか、かなり小さい頃から親特に祖母に、「地震があったら津波」というフレーズをしつこく言い聞かされていました。ですから、いつ何処でも地震を体感すると「津波は？」と思うことが習慣になっていました。『津波てんでこ』ということも、刷り込まれていました。

さて私が、士会連合会の会誌「建築士」の編集委員をしていた頃のことです。毎年九月号は防災を特集していました。ある年のこと、防災のテーマを何にしたら良いか意見を求められましたので「津波」を是非取り上げてほしいと提案しました。それに決まり、予備調査を私がやることになりました。丁度その時点で岩手県建築住宅課長のS氏が田老で昭和三三年の「チリ地震津波」の被災体験をされたことを知っていましたので、早速相談に行きました。ところがS氏は、『いち早く逃げるしかない。堤防も万全とは言えないし、建築的にあれこれしても無理！無理！』と云うのです。そして逃げるための体制を『どう作るかが早道』という事でした。また回転ドアの事故を検証した「失敗学」の先生にも『津波のことは分らない。逃げることが最善だろうが・・』というようなことで、結局特集は組めませんでした。今回の津波で、これらのことが思い出されてなりません。

津波の被害　no.1

津波の被害　no.2

津波の被害　no.3

一年以上も経てきますと、復興計画や具体的な建築の提案が多く寄せられています。玉石混淆の感ですが、深い洞察がなく、思い付きが多いようです。例えば、首都圏の大学に脚を掛けているある建築家の先生は、学生を使役しての早業で、ＲＣの高層建築や流線型の波に抵抗しない形の建築、一、二階をピロティにして波をやり過ごす案など提案しています。地元では、功名心と金欲を秘めた、「ためにする」論と冷やかですが、地元建築界のやっかみを差し引いても、実に軽薄なものとしか思えません。

私には何が津波防災になるか未だ整理が付きませんが、津波襲来直後に目の当たりにした直感、すなわち自然の大きさに畏怖畏敬した気持ちを原点として考えて行きたいと思っています。

【㈱三衡設計舎代表取締役】

あっという間に三八年

加治喜久夫（一九七四卒）

早いもので卒業して三八年が過ぎてしまいました。研究室は一般構造・生産研（現在枝広研）卒で、卒業された諸先輩の方々は現場に従事している方が多かったと記憶しています。その関係もありまして入社試験での面接で現場を希望したのですがなぜか設計に配属になってしまいました。七四年にフドウ建研という会社に入社し、訳のわからない構造設計に従事しました。元々現場を希望したのですがなぜか設計になってしまい、訳がわからず四苦八苦したことを今でも鮮明に覚えています。

卒業して三八年の間に、業務で全国各地を飛び回り沖縄県を除き全国を巡りました。

おかげさまで何とか構造にも慣れ、設計できるようになりました。ただ構造といってもプレストレストコンクリート（ＰＣ）構造が専門の部署で、はじめの頃は、専門用語が分け解らず私なりに勉強したことも今では良い思い出となっています。このフドウ建研に三〇年在籍しました。その後ピーエス三菱に転職し、名古屋に三年弱在籍しました。名古屋でも同様にＰＣ構造を専門として設計と営業に従事しました。現在では川田建設に在職して、名古屋と同じようなことをしております。

三八年間の間に自分なりに良くできた仕事としては、建研の大阪時代に設計した直径五〇メートルの球形ドーム屋根を手がけたこと、東京では約五年間開発業務を担当し、新製品の開発、特許等の取得、建築学会等の対外活動に傾注していました。川田ではコンクリート圧縮強度ＭＡＸ一二〇ニュートンの部材を客先に売り込み、完成できたことが心に残っております。

川田での仕事もあと一～二年とおもいます。この間で今まで従事した経験を生かし、後進の指導・育成に全力を注ぎたいと考えております。

終わりに七四年に建築学科を卒業した仲間と年一回芝浦の校友クラブで集まっております。会の名称は七四年卒で梨の会としようと思いましたが梨の別名でありの実会と称して今年で七回目を迎えます。皆すでに六〇歳を超え、殆どの者が第二の人生となっており年一回程度ならと思って継続するようにしております。七四年建築学科卒の方は是非ご参加いただけますよう、この場をお借りしてお願い致します。

【川田建設株式会社プレキャスト部】

東日本大震災に思うこと

竹久保洋（一九八四卒）

学生時代は毎日早起きをして、栃木県の自宅から大宮、芝浦校舎に通いました。卒論は浜田・上村研究室に属し、ＲＣ試験体を造り破壊実験を行ったことを覚えています。

私は当時の建築学科の就職先としては希だった行政（栃木県庁）の道に進み、主に住宅や都市計画部門を歩み、そして昨年三月の東日本大震災に見舞われました。地震発生の翌日からは、官民の判定士延べ九〇〇人以上の一人として、県内各地域で被災した住宅等の使用が可能かを判定する震災建築物応急危険度判定を実施しました。罹災証明の判定と勘違いされ戸惑うこともありましたが、判定した約五一〇〇棟のうち約六七〇棟が建物への立ち入りが危険と判定されました。また、瓦屋根の被害も多く、現在でも修繕工事が追いつかず屋根にブルーシートがかけられたままの住宅も残っています。さらに、栃木県内の被害の特徴の一つと思いますが、宇都宮特産の大谷石造りの塀が倒れる被害が続出しました。建築基準法に定められた基準（工法）が施されていなかったこと等が主な要因と考えられ、行政として基準の周知を図ることが必要と考えています。

私は大地震発生後間もない四月に建築課に配属となり、現在は防災拠点となる庁舎や県立学校等の災害復旧や耐震化に取り組んでいます。地震力に対する強度や粘り強さを示す構造耐震指標（ＩＳ値）を基に耐震化を進めていますが、今回の大震災では耐震改修済の県立学校において構造壁にクラックが入る等の被害が発生しました。「補強工事を行いながら被害を受けるとは？」との意見もあると思いますが、周辺の被害状況から見れば、補強工事を施工済であったから重大な被害に至らずに済んだと考えています。

栃木県も被災県ですが、甚大な被害を受けた東北地方の県に復興支援を行うため技術系職員の派遣を行っています。用地の確保など課題も多いとの情報もありますが、一刻も早い復興が図られ安全で安心な日常生活に戻るよう心から願っているところです。

最後になりますが、恩師である上村智彦先生の最終講義と退職記念祝賀会が都内で開催され出席させていただきました。一九八四年卒の研究室仲間の出席がなかったのは残念でありましたが、今後も会合等に出席し芝浦の同窓生との親交を深めたいと思います。

【栃木県庁】

今私がしていること

松崎雅子（一九八九卒）

四年生の卒業設計をしている間に年号が変わり、平成元年入社の私は平成の年数だけ設計の仕事をしています。小柳津研究室では集合住宅の設計を学んでおりました。

一〇年ほど前から何件かの再開発の設計にかかわっています。再開発には従前にあった店舗や事務所そして住宅の権利者がいます。再開発で権利者住宅をつくる場合、地域コミュニティはそのままにひとつの建物の中に権利者を集約する事になります。ここ四年は権利者住宅を担当して、要望にあわせた間取りや仕様の設計していました。権利者には高齢者が多く、ライフスタイルも様々、親子・姉妹・友人等の関係性があり、それを念頭に置きながら個々のニーズに合った打ち合わせをする一方で、開発はかなりの時間がかかりその要望も変化するので、複雑でとても難しいものでした。従前そのままの生活を望む方も多く、通常の集合住宅設計とは異なり権利者ごとに各戸の間取りや仕様を検討し、設計も施工も根気のいる作業となりました。集合住宅には新たなコミュニティが生まれるものですが、既存のコミュニティをそのままに建物をあわせていくのも再開発の中では大切な設計の仕事なのだと思います。

昔、小柳津先生が「自分の卒業設計は、一〇年ぐらいしてから見ると役に立つぞ」とおっしゃっていたのを思い出しました。押入れの奥にしまっている卒業設計をあまり見返したことはありませんでしたが、「昔住んでいた街を、鎮守の杜を中心に再生する」ことをテーマとしていたと記憶しています。今私がしていることは学生時代に考えていたことそのままなのだと改めて気づいた次第です。

八月一一日に小柳津先生の訃報に接し、研究室時代にいろいろ教えていただき、今の私の基礎をつくっていただいたことをあらためて思い出しました。感謝とともに、ご冥福をお祈りしたいと思います。

【入江三宅設計事務所】

パリの運命

林要次（一九九九卒）

初めてパリを訪れたのは在学中の一九九七年二月。パリから南へ下り欧州の主要な歴史的建築を巡ろうと考えていました。その出発直前、ル・コルビュジエのシンポジウムが田町の日本建築学会で開かれました。そのとき来日中のル・コル

ビュジエ財団事務局長に片言の英語で「ル・コルビュジエ作品の住所を教えてほしい」という世にも下らない質問をしたところ快諾。数日後パリに到着し事務局長に連絡。すると、ル・コルビュジエ作品と関わりの深い人々を紹介され、当時一般公開されていなかったル・コルビュジエ作品群を訪ねることができました。

この運命的な出来事から今年で十五年。細切れですがフランス政府給費留学生として、文化庁新進芸術家として、建築事務所のスタッフとしてこれまで計約七年をパリで過ごしました。そして先日、手がけていたル・コルビュジエの著書『パリの運命』の翻訳本が彰国社から出版されました。

『パリの運命』は一九四一年に出版された小冊子で、自身の都市理論《輝く都市》をパリに適用しその将来像を描き出しています。フランスは一九四〇年にナチス・ドイツと休戦協定を結び事実上敗北しました。ル・コルビュジエはナチス占領下のパリを離れ、この本を疎開先で書き上げました。敗北後に出版されたこの著書では国家の危機的状況における建築家や都市計画家の都市の再建に対する振舞いが体現されています。ル・コルビュジエは現実の都市や都市計画の諸問題に敏感かつ的確に反応し、詳細な現状分析に裏付けられた提案でその問題を浮き彫りにしています。訳者解説ではル・コルビュジエの提案を支えた様々な人間模様を描きだし、ル・コルビュジエの天敵とされたアカデミー側との関連や当時の状況などを中心にまとめることでル・コルビュジエ提案のより詳細な理解をめざす分析を行い、いままで余り語られることのなかったル・コルビュジエ像をつくりだすことをめざしました。　【ｙｏｊｉ ｈａｙａｓｈｉ＋ａ．ｄ．ｓ．】

立ち位置について
田内徹郎（二〇〇四卒）

私は現在、主に住宅の設計から施工までを行う会社に勤めています。

在学中は、小柳津先生のもとで設計を勉強していました。そのころは、設計事務所で働いたのちに、独立して事務所を構えるというようなことを考えていました。しかし、大学を卒業した頃ぐらいから、だんだんと設計者の立ち位置というものに疑問を持つようになりました。例えば、誰のためにつくるのか、何をつくるのか、何に責任を持つのか、というようなことです。また、そのような事を悶々と考えながら応募したコンペの案などは、ずいぶんとややこしくて頭をこねくり回したようなものにもなってきました。自分の中のバランスが崩れ、だいぶ頭でっかちになっていたようです。

そこで、思い切って設計から一度離れて建築の現場に出ようと考えました。大学の先輩である渡邊隆社長が経営する風基建設にお世話になり。大工の見習いとして五年間働かせてもらいました。そして現在、同じく大学の先輩である岸本耕社長の経営する吉川の鯰で、設計から施工管理を主にやらせてもらっています。また状況によっては、現場で作業もしています。

そして再び設計に関わるようになって思うことは、以前とは考え方がだいぶ変わったということです。今は、形を考えていく段階から耐久性、施工性、経済性というものを同時に気にするようになりました。

形を考えていく尺度が大きくなったのはよかったのですが、基準となる立ち位置はまだつかめていません。見習いだったとき、私は職人として立ち位置がはっきりと定まっている多くの方々と出会うことが出来ました。そういう印象を受ける方々に共通しているのは、仕事に対して誇りを持っているように感じます。そして、厳しい状況の時など、最終的にはこれを基準にして判断しているようでした。

ですから、今後は経験を積みながら、同時に誇りというものの培っていきたいと思っています。　【（株）吉川の鯰】

卒業後の自分
青木貴宏（二〇〇九卒）

私の卒業年は二〇〇九年。あの東日本大震災という、日本人にとって忘れ難き災害のあった年に、私は本大学の修士課程を修了致しました。しかし、私はこの震災を経験していません。震災のあった三月一一日は友人三人と卒業旅行でヨーロッパを周遊している時だったからです。日本で地震があったらしい、という情報は把握できていたのですが、事の重大さに気が付いたのは、次の日アムステルダムの街を歩いている時でした。街の新聞が全て日本の地震の情報で埋め尽くされていたのです。そこには信じ難い津波の被害を受けている被災地の姿がありました。震災の四日後に無事帰国出来たのですが、街並みはとても暗く、今後に大きな不安を抱えていたことを覚えています。卒業式も中止となり、お世話になった方々や、共に学び競いあった友人達との別れの言葉もままならぬまま、私は就職しました。

私の就職先は神奈川を拠点に、近年仕事の幅を全国区に展開している日比野設計という組織設計事務所です。「命を育む施設から、終の住まいまで」をコンセプトに、主に特別養護老人ホーム、老人保健施設などの福祉施設や保育所、幼稚園などの幼児施設の設計に特化した設計事務所です。社員数は四〇名前後で幸運な事に、仕事の依頼は全国から年々増えており、予想通り、予想以上に仕事に追われる日々を過ごしています。

この執筆をしている今現在（二〇一二年八月）までの一年半の業務内容を簡単に述べたいと思います。私は「幼児の城」という幼児施設に特化した部門に配属しています。幸運な事に、これまで四件の設計活動に関わらせて頂き、内容・規模も多少ジャンルの違うものとなっており、とても充実した日々を送らせて頂いています。入社後最初に携わったのが、埼玉県にある新設の木造平屋の保育園でした。その後、木造二階建の保育園の増築、幼稚園の鉄骨造二階建の増築、そしてこの夏、鉄骨造二階建の新設の保育園の実施設計が修了し、四園目が着工しようとしています。

まだ社会人二年目という段階ですが、こうして多くの仕事に関わらせて頂いている状況もあり、少しずつ建築のことが理解でき始めているという実感と共に、この仕事の責任の重さ、難しさも強く感じています。当然自分の時間を犠牲にして仕事を終わらせなければならない状況になることも多々あり、精神的、体力的にも厳しいと感じることがあります。しかし、実際に出来上がった建築を体感し、オーナーの喜びや社会的な評価を頂いた時には、何とも言えないような喜びを感じる事ができるということも体感しました。

今栃木県で次の設計の案件が来ています。年内には実施設計を終了させるような工程です。皆様にお披露目できるような、オーナーの満足いくような、そして自分自身にも満足できるような設計活動に励んでいきたいと思います。

【株式会社日比野設計　幼児の城】

非常勤講師にあたり
功刀強（一九七六卒）

前回担当しましたのはプレディプロマ的な少しハードな課題設定の四年生の設計演習でした。三井所先生と三年行い、三井所先生と志村先生と三人で二年、三井所先生が退任された後、南先生を中心に小柳津先生も入られた先生方と一年間と計六年間担当させて頂きました。四〇年前の学生時代の恩師であった小柳津先生には卒業後も当事務所に優秀な卒業生を紹介して頂いたりと一方ならぬお世話になっておりました。その先生と今まで教えてもらう立場の私が、この設計演習では肩を並べ、課題を指導させて頂きました。教える立場の私が、最も多くの事を学んだような気がしています。

小柳津先生は卒業後設計事務所に勤めておられましたが、乞われて大学に戻りました。当時の先生方の多くは設計事務所を持ちながら教員をしておりました。しかし小柳津先生は設計事務所との二足わらじを履くことを潔しとせず、大学教育と研究に打ち込まれてきました。今回の私の任にあたりましては過分な推薦文を頂き、その期待に応えねばと気を引き締めておりましたところ、八月一一日訃報が入りました。もう先生からの思いやりのある厳しくも優しい言葉を聞くことは叶わなくなりました。

この時期に再び母校の設計教育に携わることができることに何かの巡り合わせを感ぜずにはいられません。小柳津先生の教育に対する熱意と建築に対する思いの何十分の一でも受け継ぎ、建築学科に入学してきた学生達に先生の建築に対する真摯な精神を少しでも伝えて行ければと思っています。

設計演習では設計技術だけではなく、人間がつくってきた歴史に学び、受けつがれてきた文化、文明について共に考え学んで行きたいと考えています。

ものを創ることを考えることは楽しいことです。現実にものを造れるようになることはもっと楽しいことです。このことも伝えて行きたいと思っています。

最後に小柳津先生の教育と建築に対する思いを肝に銘じ御冥福を心よりお祈りしたいと思います。

【大宇根建築設計事務所　所長】

建築学科の近況報告

堀越英嗣
（二〇一二年度建築学科主任）

建築学科の近況を報告いたします。

二〇一一年度の学位記授与式、卒業記念パーティーは三月一九日に東京国際フォーラム及びインターコンチネンタル東京ベイで行われました。

建築学科第五五回卒業生として一一四名が卒業いたしました。各賞の受賞者と卒業設計・卒業論文のタイトルは以下の通りです。

□学業成績最優秀賞・総代
山本彩華

□学業成績優秀賞・有元賞
澤田晃佑

□学業成績優秀賞
長谷川侑香／土屋勇太郎／近藤裕理／後藤健一郎
長谷部美紅／天笠絵里加

□卒業設計最優秀賞・三浦賞
近藤裕理　「まちのローカル一真鶴の特徴を活かしたコミュニティ・スクールの提案」
□卒業設計優秀賞
片山豪　「お払い箱の明日ーガソリンスタンドを起点とした都市の拡張、医療とエネルギーの再考」
加藤健司　「2つの世界」
□卒業論文優秀賞
佐藤大輝　「一瓶塚稲荷神社（栃木県佐野市）の建築史研究」
佐藤裕也　「公的賃貸住宅団地における長期居住に関する研究」
関啓太　「戸建住宅における通風の解析に関する研究」
前田安佳里「小学校と大学、住民の連携による「まちのカルタづくりワークショップ」の開発に関する研究」
増田沙央里「境界面の音響散乱を考慮した室内音場解析法に関する研究」
□卒業論文優秀賞・浜田賞
新藤智記　「不整形平面形状を持つ免震建物の立体振動性状の把握」
長野愛　「鉄筋コンクリート造梁・柱接合部における破壊モード別による接合部補強筋の挙動接合部補強筋の歪量に関する解析的研究」
平山遼　「圧着接合されたプレキャストプレストレストコンクリート造骨組における断面欠損に関する研究」
山本彩華　「伝統構法と在来構法を併用した木造住宅の耐震性に関する研究」

昨年の大震災の影響で中止になっていた二〇一〇年度並びに二〇一一年度の非常講師懇親会が三月九日にホテル西洋銀座で開かれました。

二〇一二年度の入学式は四月三日に東京国際フォーラムで行われ、建築学科では一二八名の新入生を迎えました。今年は校友会提供による東京フィルハーモニーによる演奏会も行われ、震災後一年を経て、明るく格調ある入学式となりました。

二〇一一年度でご退任された上村智彦先生、毛井正典先生が名誉教授となられましたことをご報告いたします。

今年度から藤澤彰先生に変わり、堀越英嗣が主任となりました。よろしくお願い致します。

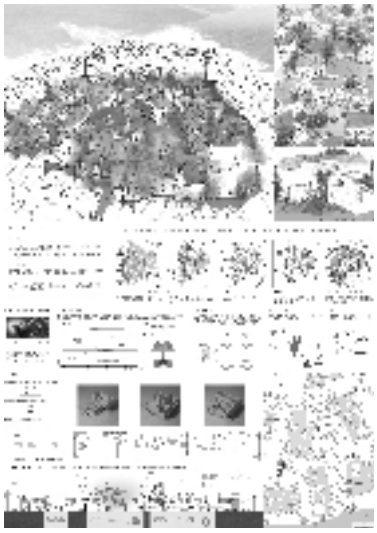
第一〇回　デザインチャンピオンシップ

第一〇回を迎えたデザインチャンピオンシップが、二〇一一年の芝浦祭期間中の一一月四日に開催されました。デザインチャンピオンシップは二〇〇二年より始まった建築学科主催の建築設計コンペです。毎年、外部講師をお招きして、七月に出題とご講演を、一月の学祭期間中に合わせて公開審査と作品展示を行います。過去には隈研吾氏、内藤廣氏、山本理顕氏他の著名建築家が出題を行い、また学科、学年を問わず応募できるので、建築学科の一大イベントとして定着しています。

二〇一一年は東京大学名誉教授の難波和彦先生に出題いただきました。難波先生は、設計事務所の界工作舎を主宰されている建築家であり、「箱の家」シリーズの戸建て住宅作品や「建築家は住宅で何を考えているか」等の多数の著書を手がけられています。

『サスティナブルな「まち」の「いえ」』という出題に対し、建築学科をはじめ、建築工学科、環境システム学科、デザイン工学科、大学院から総勢二七組五八名の応募がありました。パネル展示の一次審査、公開プレゼンテーションの二次審査を行い、大学院一年生チームの作品「めぐり　めぐる　風景」（洲崎洋輔・桶川遥香）が最優秀賞に選ばれました。その他に優秀賞二点、佳作五点が選ばれました。

本年も第一一回のチャンピオンシップが、工藤和美氏（東洋大学教授・シーラカンスK&H代表）の出題で行われます。学祭期間の一一月二日（金）一三時から豊洲校舎製図室で公開審査を行う予定ですので、是非、足をお運び下さい。


最優秀作品「めぐりめぐる風景」

講演会ポスター

難波和彦氏

受賞者全員で記念撮影

□デザインチャンピオンシップのこれまで

第一回（二〇〇二年）審査員：隈研吾氏
出題：ｕｎｉｔ　ｏｂｊｅｃｔ

第二回（二〇〇三年）審査員：元倉真琴氏
出題：都市の隙間ーあなたが都市を変える

第三回（二〇〇四年）審査員：内藤廣氏
出題：動く構造体

第四回（二〇〇五年）審査員：山本理顕氏
出題：都市ミュージアム

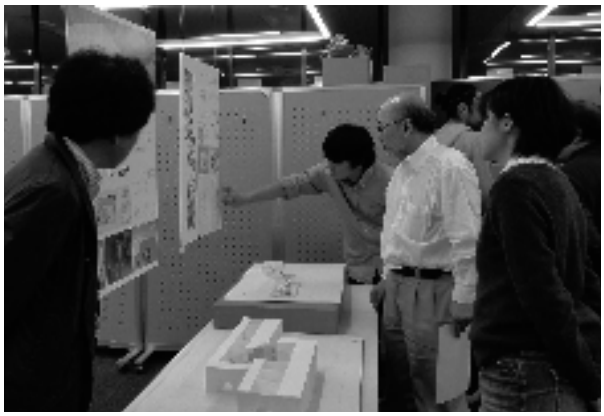
第五回（二〇〇六年）審査員：小島一浩氏
出題：新校舎に“ＦＬＡ”をインプットせよ

第六回（二〇〇七年）審査員：古谷誠章氏
出題：ハイパースクール／学校を超えた学校

第七回（二〇〇八年）審査員：北山恒氏
出題：未来の集合体

第八回（二〇〇九年）審査員：山下保博氏
出題：新しい環境の創出

第九回（二〇一〇年）審査員：栗生明氏
出題：ＥＡＲＴＨＴＥＣＴＵＲＥ



プレゼンテーションの様子

卒業生による就職セミナー

二〇〇四年より続いている卒業生による「就職セミナー」が、昨年も一一月十六日に開催されました。より厳しさを増す就職活動を間近に控えた現役学生にむけて、先輩達から自分は何を考え、どういう選択をしたかを率直に語って頂き、進路決定に役立てるというのが、この会の趣旨です。施工、設計など各分野五名の先輩方のお話に、一二〇名の教室がほぼ満員、現役生達は真剣に聞き入っていました。講演終了後は学生が個人的に先輩方に話を訊く姿が散見されるなど、卒業生と現役学生の交流の場にもなりました。講演者とお話しの概略をまとめました。

■施工分野から
大成建設株式会社
上田大裕・二〇〇五卒（枝広研究室）

体育館やマンションなどこれまで担当されてきた物件の紹介を交えながら、施主、設計者、専門工事業者などの関係各者と施工者がどのように関わるのか、また、施工管理のＱＣＤＳ（品質・価格・工期・安全）をどうコントロールしているかについてお話し頂きました。「上田さんの一日」のお話しでは、ゼネコン勤務のイメージが学生に分かりやすく伝わったことと思います。

■設備分野から
株式会社ＮＴＴファシリティーズ
根本摩耶・二〇〇六卒／二〇〇八大学院修了（西村研究室）

入社四年目の根本さんは、設計、工事監理、ファシリティマネジメント（ＦＭ）等の業務をされているそうです。この分野での設計・工事監理とはどのような業務か、ＦＭ業務とは何か、についてお話し頂きました。ＮＴＴの建物は非常事態でも通信を止めないための設計をしていることや空調担当者として日夜いかにサーバーを冷やすかを考えていることなど、臨場感あふれるお話しでした。

■意匠設計分野から
鹿島建設株式会社
原嶋宏樹・二〇〇六卒（堀越研究室）
　原嶋さんは二〇一〇年度に続き二度目の登壇です。学生時代から入社六年目の現在までを振り返り、年を追うごとに考え方や仕事の内容がどう変わってきたのかについてお話しして頂きました。特に学生時代に設計に夢中になった話や現職につくに至った話は、設計を目指す学生への大きな刺激になったと思います。現在は某国の博物館など海外での仕事にも取り組まれているそうです。

■官公庁から
東京都・都市整備局
大野恵理・二〇〇八卒（林研究室）
　二〇一〇大学院修了（上村研究室）
　東京都庁で建築職についている大野さんは、学生時代は耐震の研究をされていたとのことです。大学院をでてなぜ公務員なのか訊かれることも多いそうですが、その辺のご事情も含めて、建築職の業務内容や、就職活動の際に心がけたこと、学生時代にやっておけばよかったと思うこと等を赤裸々に楽しくお話し頂きました。帰宅が夜中になることがあるほど多忙のようですが、都職の魅力については学生に十分伝わったと思います。

■構造分野から
株式会社熊谷組
志村崇・二〇〇七卒（林研究室）
　構造設計部に在籍する志村さんですが、初めての仕事は花壇の構造設計だったそうです。その後、保養所、集合住宅、モニュメント等に携わり、入社五年目の現在は映画館を担当されているとのことです。構造設計とは何か、構造設計に対する入社前イメージと入社後の実態のギャップ、誰のために建てているのか、等について構造設計者らしい冷静で落ち着いた語り口でお話し頂きました。

上田大裕氏

原嶋宏樹氏

志村崇氏

根本摩耶氏

大野恵理氏

就職セミナー風景

第二回　建築会同窓会・懇親会

　左記の要領で建築会総会・懇親会を開催いたしますので、会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご出席いただきたくご案内申しあげます。

記

□日時　平成二四年一二月八日（土）
□会場　芝浦工業大学　豊洲校舎交流棟五階　五〇一教室
　東京都江東区豊洲三－七－五
　東京メトロ有楽町線「豊洲」駅 徒歩一〇分
□会費　四、〇〇〇円（在校生は、二、〇〇〇円）
□概要
■記念講演
「座談会～建築学科創立六〇周年を巡る光と影」
　受付　午後二：三〇～
　座談会　午後三：〇〇～
　◇パネリスト
　・石川　洋美 名誉理事長
　・三井所　清典 名誉教授
　・加藤　國雄 建築会元会長
　・枝広　英俊 教授
　◇コーディネーター
　・道田　淳 建築会副会長
■合同懇親会　午後五：〇〇～六：三〇
□連絡先
■学内事務局
芝浦工業大学建築学科
ＴＥＬ：〇三－五八五九－八四〇〇（学科事務室）
■学外事務局
（有）ＫＡＩプランナー
〒一一四－〇〇一四
東京都北区田端一－二〇－二五　染谷ビル
ＦＡＸ：〇三－三八二四－五五七〇
Ｅ－ＭＡＩＬ：sit_arch@yahoo.co.jp

※出席連絡ハガキは一一月二〇日までにお出しください。

二〇一二年度会費納入のお願い

二〇一二年度決算は左記の通りです。ここ数年、会費納入率は徐々に改善されておりますが、まだまだ低調ですので、是非、皆様のご協力をお願い致します。同封の郵便振替用紙で年会費二、〇〇〇円をご送金ください。会員番号が封筒のタックシールに記載されておりますので、郵便振替用紙の会員番号欄にご記入ください。住所や勤務先などに変更があった方は通信欄にその旨を記載して下さい。名簿のデータを更新します。

なお、名簿への不掲載を希望される方は会費振り込み用紙の通信欄にその旨をご記入下さい。

編集後記

本号もお忙しい中、原稿を快諾して下さった卒業生の皆様、先生方、関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

届いた誌面の中に旧知の学友がいれば、きっと嬉しいはずです。見つからずとも、同じ建築学科を卒業した学友の活躍などを知ることは励みになると思います。今後も、学友と建築学科の今を誌面でお届けできるように頑張って参りますので、引き続きご協力のほど、よろしくお願い致します。

来る一二月八日には第二回建築会同窓会と懇親会が開催されます。学友との再会や新たな出会いが楽しみな懇親会ですが、二〇一四年に建築学科創立六〇周年を控えた今年は、その前々夜祭として、創立以来の歴史をひも解きながら、様々な逸話も盛りこんだ記念講演をお届けする予定です。建築学科の歩みを俯瞰できる貴重な機会です。ぜひお誘い合わせの上、お越し下さい。お会いできるのを楽しみにしております。

道田淳（一九九三卒）

個人情報の取り扱いについて

二〇〇五年四月一日より「個人情報の保護に関する法律」が施行されました。本建築会におきましても会員の個人情報（氏名、自宅住所、郵便番号、電話番号、勤務先名、勤務先電話番号等）につきましては、芝浦工業大学建築会会則第八条により厳重に管理しております。

第八条（個人情報の取り扱い）

（一）建築会の個人情報は以下の目的に使用する。

一．芝浦工業大学建築会「名簿」の作成資料

二．建築会会報の送付

三．建築会関連の案内

四．芝浦工業大学からの案内、連絡事項など

五．会員による同期会等の連絡

（二）会員から提供された個人情報は上記利用目的の範囲を超えて利用しない。又収集した個人情報の利用、提供には厳正な管理の元「本人の同意がある場合」又は「法令等で要求された場合」を除き、第三者に開示、提供しない。

（三）名簿作成に当たり氏名以外の個人情報（住所・電話番号・勤務先）削除の要求がある場合はその趣旨申し出により名簿から削除する。

（四）会員個人情報の管理は建築会事務局が一括して行う。

お問い合わせ　学校法人芝浦工業大学建築学科内建築会担当

〒一三五―八五四八

東京都江東区豊洲三―七―五

ＴＥＬ：〇三―五八五九―八四〇〇

ＦＡＸ：〇三―五八五九―八四〇一

2012年度　会計報告（2012.7.31現在）

収入	繰越金	普通貯金	44,753
		普通貯金（支出対応口座）	1,000,000
		普通貯金（会費受入口座）	1,758,550
		現金	5,761
		小計	2,809,064
	会費	年会費振込み	830,000
		雑収入　総会会費残金	52,500
		郵便貯金利子	35
		小計	882,535
	計		3,691,599 円

支出	会報第27号印刷費・送料		786,961
	ホームページ維持費		117,180
	事務費	通信費	0
		振込手数料	2,030
		事務用品費	0
	計		906,171 円

次期繰越	普通貯金	44,772
	普通貯金（支出対応口座）	94,195
	普通貯金（会費受入口座）	2,640,910
	現金	5,551
	計	2,785,428 円

支出＋次期繰越金	3,691,599 円

建築会ウェブサイト

http://sit－arch.com/